



「木を見て森を見ず」という言葉。もちろん皆さんご存じのことでしょう。発達に偏りがある人は1本の木を見てしまい、全体である森を見ることが難しいのが特徴である。さらに極端になると木の細部が気になり、葉脈に気を囚われて、幹が枯れているのに気が付かない。ただ、全体を見ることができないのではなく、特定の場所にこだわり、全体像を見落としやすいのである。木がなぜ生えているのか？なぜ木は長生きできるのか？木はなぜ立って居られるのか？疑問に感じ、地下にある根っこに興味をもつなど、普通の人気が気にならないことに目が向くのである。言い換えると、特定の樹木の専門家になれるかもしれない。ただ、本当の専門家になるには、やはり森を構成する一要素としての木として捉えることが必要なのは言うまでもない。自然環境という大きな枠組みのなかでの森について考えなくてはならない。しかし、人によって限界があり、すべての人に隅々まで見る能力が備わっている訳ではない。

文明が発達して多くのことが解明され、それをすべての人に理解してもらおうと求めることは非常に難しい。現代社会では、全体を見渡すことができ、かつ隅々まで配慮できる人材が求められ、それができる人は企業で生き残り、ピラミッドの頂点に上り詰めることができる。一方その配慮ができない人は戦力外通告をうけ、第一線から外され、努力しても這い上がれない。現代社会のいわゆる二極化である。最先端を走る研究者も毎日が戦場であり、彼らは弛まぬ努力をし続けたいといけない。少し油断をすると、取り残され追いつけなくなってしまう恐怖におびえ、居心地がよいとは言えない。

精神医学の研究分野でも同様に、日々研鑽して素晴らしい論文のみが世にできることを期待されている。日常のごくありふれたことだが、視点を変えると非常に重要なことを

発表しても、見向きもされない。研究者はいつも新奇性を求められ、最先端で居続けなければいけないプレッシャーから意図的な力が働いてデータの改竄を行ってしまい、後日発覚して奈落の底へ落ちることも珍しくはない。

また、良い研究、良い結果をだすために、均一な対象に絞った研究であれば、確かに、誰が見ても納得する論文となるだろう。しかし、それは、研究のデザインという特別な条件下での知見であり、実臨床の場で役に立つのかは、一度立ち止まって考えていかななくてはならない。

話は変わるが、あるテレビ番組のなかで、大型トラックが崖に沿って続く細い山道を通るときの運転手の目の動きを観察した結果、道のガードレールや縁石ではなく、なんとなく前方をゆったりと見ている視線の軌跡を捉えていた。つまり、通れるかどうか道の細部を見ているのではないのである。このような運転を皆できれば問題ないのだが、一方で運転に慣れていない人が俯瞰したような視線であれば、事故を起こすことは明白である。細い道に慣れた運転手は、車幅感覚をしっかりと身につけ、車の特性を知っているからこそ事故なく運転できたのだ。研究の場に置き換えるなら、細部にこだわり、探究心をもって突き詰めるだけではなく、時折俯瞰して研究の倫理面に配慮し、臨床的意義を再確認することが必要であろう。つまり、細部と包括的な2つの視点から研究を考える能力をもち合わせた研究者が求められ、一人の研究者にかかる負担が大きくなっているのである。自分に足りない能力を補う良き共同研究者がいれば、よりバランスの取れた素晴らしい研究結果が生まれるであろう。

研究活動がさらに活性化し、本誌がその成果を紹介する場になることを熱望する。

忽滑谷和孝